

今週のメニュー

■トピックス

◇InterAqua 2016・プラスチック製雨水貯留槽の展示

■随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(13)

木下 清隆

■編集後記

■トピックス

◇InterAqua 2016・プラスチック製雨水貯留槽の展示

[InterAqua 2016 第7回国際水ソリューション総合展](#)が1月27日～29日に東京ビッグサイトで開催され、3日間で約48,000人の来場がありました。本展示会は水ビジネスに関わる展示会で、関連する企業や政府機関等が水を取り巻く環境と技術を紹介しています。

近年頻発する都市型水害に対応するため様々な雨水・浸水対策の技術やシステムが注目されています。雨水対策に用いられる部材、装置、設備等の展示の中から、雨水貯留浸透技術協会が会員企業と共同で出展したプラスチック製雨水貯留浸透施設について今回紹介します。

住宅地、ビルや道路のコンクリート化やアスファルト化など近年の市街化の進展により雨水が地中に浸透する面積が少なくなり、豪雨の際には大量の雨水が短時間に集中して下水道や河川に流出して深刻な浸水被害につながる場合があります。その対策として地下に雨水貯留浸透施設を設置する方策が雨水流出の抑制効果に大きく寄与することが知られています。プラスチック製雨水貯留浸透槽は、プラスチック製貯留構造体を積層して空隙率90%以上を有する数10～数1000m³規模の貯留槽を人力で迅速に構築することができ、コンクリート製のものと比較して軽量で、地下に早く、安く構築できる点に特長があります。また、設置場所の状況に応じ外装を覆うシート類を組み合わせることで雨水の貯留または浸透のいずれの用途も選択できます。

貯留構造体はポリプロピレンが主流ですが、塩ビ管を利用した地下貯留槽が開発され(株)トーテツより出展されていました。この貯留槽は鉛直方向に延伸して荷重を受けるスペーサーに塩ビ製パイプが使用されています。空間のある構造となっているため貯留槽内部の点検や清掃が可能になり、これを特徴として用途の拡大につながることを期待されます。



トーテツ製地下貯留槽の一例

プラスチック製雨水貯留浸透施設の市場は、過去10年間で施工件数が着実に増えて2014年度には年間約58万m³に達しています。最近の雨水対策に係る法整備や自治体の支援制度などによって公共施設へも適用が増えると予想され、今後の市場規模の拡大が見込まれています。

また、雨水貯留浸透技術協会は海外での雨水活用の技術と製品による事業展開に力を注いでおり、インドネシアやインドでの取り組み事例が今回の展示場でも紹介されていました。これらの国において制度設計や技術基準の整備が進むと需要拡大につながると考えられ、そこに日本の製品の技術や品質が生かされることによって普及がより促進されると期待しています。

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(13)

木下 清隆

<前回とのつながり>

「度会氏は『太神宮本記』によって大若子命を宣伝し、これが功を奏し大若子命は朝廷の尊崇を受けるまでになった。このような伝承が櫛田神社に伝えられていることからみて、櫛田神社の祭神は大若子命であるといえる」が、前回の結論である。今回は櫛田神社のその後の歴史、及び前回登場した「櫛玉命」の謎解きである。

中世において、大若子命の名が出てくる文献として『神皇正統記』がある。この中の垂仁天皇の条に、「大幡主ト云人ヲ大神主ニナシ給」とあり、北畠親房がわざわざ大幡主命、即ち大若子命に触れているくらいだから、この著書が完成した延元四年(一三三九)当時、未だ大若子命の名は残っていたと云えよう。しかし、その神名も伊勢神宮の権威が維持されている間は保たれていたが、その凋落と共に忘れ去られていったと考えられる。

具体的に云えば、応仁の乱を挟んで式年遷宮は約百三十年間中断されるが、この時期は今まで曲がりなりにも維持されていた天皇の権威が、すっかり地に落ちた時代である。更に室町幕府の権力も失墜し、神宮の財政基盤であった神領も有名無実化してしまう。当然、伊勢神宮の力は無くなる。それまで七百年間もの永きにわたって、連綿と続いていた式年遷宮すら出来なくなったのである。

藤谷俊夫・直木孝次郎氏の『伊勢神宮』(新日本出版社、一九九一)によれば、式年遷宮の復興が成ったのは永禄六年(一五六三)、尼僧の勧進によってである。仏教徒である尼僧の情熱と武士、町人達の篤い寄進に頼らなければ伊勢神宮の造替は適わなかった。このような状況の中で、外宮ゆかりの神社であった櫛田神社が、衰微していったのは当然の成り行きだったといえよう。

このようにして櫛田神社は時代から忘れられていくが、更に、織田信長の伊勢進攻のときに、かつての栄光の影も兵火に焼かれてしまう。土地の古老の話に由れば、その後、消失した幾つかの神社の祭神は合祀され総社が建てられたらしい、それを櫛田大社と称した。

当初は広大な社地を有していたらしいが次第に田畑に開墾され、江戸末期には僅かの社地を残すばかりになった。そして明治四十一年の合祀令でこの大社は、神山神社に合祀されることになる。要するに櫛田と名の付く神社がなくなったのである。伊勢の櫛田神社が、心ある人々の手によって小さいながらも再建されたのは、昭和八年のこととされている。



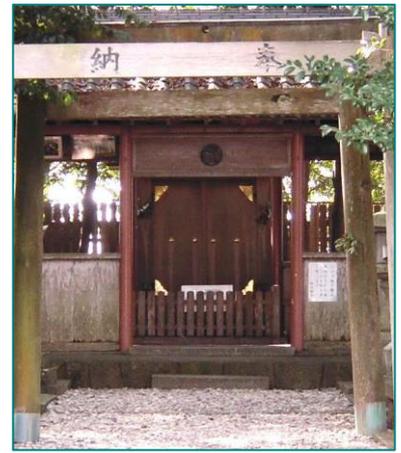
伊勢神宮（外宮）

4. 櫛玉命と大若子命

次に江戸中期頃まで櫛田神社の祭神が櫛玉命とされていた、との由緒書きの説明についてであるが、これはかなり複雑な内容を含んでいるので以下に整理しておきたい。

まず、この櫛玉命説は、伊勢の現地でもそのように信じられていた説か、という問題がある。江戸時代、櫛田神社そのものは既に伊勢地方には存在していないが、櫛田大社にその祭神は合祀されていたはずだから、古くからの櫛田神社の祭神は土地の人には、よく知られていたはずである。

その祭神は誰なのかであるが、それは大若子命だったと考えられる。何故なら、昭和になって新生櫛田神社が誕生したとき、土地の人は躊躇なく大若子命を祭神にしているからである。そして、先に紹介したような碑文や、ここで紹介しているような由緒書を作成しているからである。



伊勢 櫛田神社

では、出口延経^{でぐちのぶつね}は享保十八年(一七三三)に完成された『神名帳考証』(神祇全書第一輯、同朋舎一九七一年復刻)の中で何故、櫛玉命を祭神としたのだろうか。その理由を探るため彼の見解を調べてみることにする。彼は考証の中で、櫛田神社の所在地と祭神の説明を次のように行っている。

「櫛田神社は、今、櫛田村に在り。倭姫命世記に云う、御櫛を落し給し、櫛田の社を定め賜う云々、按ずるに只縁語を取りて、神幸の順路に属くのみ。同云う。出雲神子、出雲建子命、一名伊勢都彦神、一名櫛玉命」(原文漢文)

これだけである。前半は櫛田の地名についての説明であるが、天照大神の神幸の途次にあった櫛田の地の由来について、『倭姫命世記』は櫛田と櫛を引っ掛けて説明しているだけに過ぎないと述べている。後半は祭神についての説明であるが、これも『倭姫命世記』の一文を引用して、その祭神は櫛玉命と述べているが、何故、櫛玉命なのかは何も説明していない。引用文は櫛田神社とは何の関係もないところに出て来る文であり、何故、唐突にここを引いて櫛田神社の祭神としたのか、全く不明である。

先の大若子命説が事実とするなら、出口延経が現地確認をしていない可能性がある。彼は従来から多数研究されてきている『延喜式』神名帳に関する多くの書籍の中に記載の祭神を、そのまま写したのではなかろうか。『延喜式』神名帳は先にも述べたように、神社名の記載があるのみで、祭神その他については記載がない。このため、後世、神社の祭神、所在地、由緒等を明らかにする研究が多数行われた。^{でぐちのぶつね}出口延経の『神名帳考証』もそのようなものの一つである。

では、何故、櫛田神社の祭神は櫛玉命であるとされていたのであろうか。考え方として二つあるように思われる。その一つは、櫛田と櫛玉の類似点から、祭神は何となく櫛玉命というような伝承があったとする考え方である。そして二つ目は、『伊勢国風土記』に由来して一つの伝承が生まれたのではないかとこの考え方である。『伊勢国風土記』由来とは、この風土記逸文に、

「伊勢と云ふは、伊賀の安志の社に坐す神、出雲の神の子、出雲建子命、又の名は伊勢^{いせ}都彦^{つひこ}命、又の名は櫛玉命なり。此の神、昔、石もて城を造りて此に坐しき。」

とあり、伊勢の地名は昔この地に伊勢都彦命、又の名は櫛玉命が居たからだと説明している。更に、この伊勢都彦命は天日別命に討たれて東海に逃げ去る話も出てくる。

このように伊勢都彦命即ち、櫛玉命が伊勢の国から追われたことを示す風土記逸文から、伊勢には本来、櫛玉命が祀られていたのではないかとする考え方である。櫛田神社の「祭神櫛玉命説」は、「語呂合わせ説」より「風土記由來說」の方が、説得力があるが、出口延経を始め、その他多くの学者達がどちらの説に共鳴したのかは不明である。いずれにしても、櫛玉命説を採ったことだけは確かなようである。

しかしこの説は、出雲の神の子である櫛玉命が何故伊勢の国の先住神なのか、更に追われた神を何故後世まで祀ったのかの説明がされていないこと、その後、櫛田神社が皇室の異例とも言える厚遇を受けたことの説明が難しいこと等の問題を抱えている。しかし、江戸中期まで櫛玉命が櫛田神社の祭神であると、一部に伝承されていたことは注目される。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

今年はいじめての編集後記になります。皆様今年もメルマガよろしくお願い致します。

いい話ですが、今年になり、テレビの前に釘付けになったのがサッカー男子オリンピック最終予選でした。この大会で優勝しオリンピック出場を勝ち取ったわけですが、目を見張ったのがなんとも今までと違う素晴らしく華麗なシュートでした。これまでの日本のサッカーのイメージでは、相手のペナルティエリア付近でパスばかり回し、一向にシュートを打たないもどかしさばかりありました。しかし、今回は、ペナルティエリアのライン付近からシュートを放ち見事に決まったシーンが幾つもあり、サッカーのゴールの醍醐味が味わえました。若さ故の思い切りの良さもあるのでしょうか。この勢いでオリンピックも頑張っって欲しいと思います。(ももった)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp